絶対正義な使い魔

ロベル・アクベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絶対正義な使い魔

【Ｎコード】
Ｎ６３７０Ｐ

【作者名】
ロベル・アクベル

【あらすじ】
もしも、ゼロ魔の世界に大将赤犬が来ていたら……これは、そんな話を書いてみた物です。

「ギャアァ！僕の腕がッ！！」

トリステイン魔法学院のヴェストリの広場にて、午後の陽気には似つかわしい叫び声が響く。

そこには左腕を押さえ、地面をのたうち回る少年がいた。
彼の左腕は肘の辺りから完全に無くなっており、その傷口から判断するに、何か高温の物体で焼き切られたといった感じである。

「はん、貴族やら魔法やらと威張り腐っちょったが、大したこと無いのう。
いや、貴様がクズなだけか……」

そう呟き、額に脂汗を浮かべて地面を転げ回る少年を見下しているのは、この世界では見られない赤いスーツ、肩に白いコートを羽織り、頭には白地に青いラインの入ったキャップを被っている大男だった。

彼の胸には、溶けかけた青銅の剣が突き刺さっている。
が、この大男はそれすら気にせず、血と土にまみれた少年を見下していた。

「……ッ！！もういいわ！
あなたが強いのは分かったから、止めなさいッ！サカズキ！！」

それを止めに入るのは、彼の主であるピンクブロンドのロングヘアーを持つ美少女。
名前をルイズ・フランソワーズと言う。
彼女は少年を庇うように、サカズキと呼んだ大男の前に立ちふさがった。

ここで少し時間を遡らせ、この騒ぎの前日。
トリステイン魔法学院では、二年生昇級の為の使い魔召喚の儀式が行われていた。

「はぁ、はぁ……」

ルイズは肩で息をし、目の前の草原を力ない瞳で見つめる。
先程から、幾度となく召喚の呪文を唱えているのだが、使い魔が現れるどころか起きるのは爆発だけ。
既に、この事を十数回繰り返していた彼女の疲弊は、目に見えるものだった。

その後ろに、禿頭の中年男性が歩み寄る。

「ミス・ヴァリエール。
今日はもう止めたまえ。
機会なら、私が何とか言って与えてもらうように頼むから」

心配した口調で、男性は言った。
彼は彼女の教師だ。

この使い魔召喚が出来なければ、ルイズは留年なのである。
彼女の才能や努力を知る彼は、これ以上ルイズに無理をさせたくなかったのだ。

しかし、ルイズは男性に怒鳴る。

「ミスタ・コルベール！
あと一度、あと一度だけお願いします！！」

コルベールと呼ばれた中年男性は軽く悩む仕草をしたが、諦めたように後ろに一歩下がった。

それを見たルイズは深呼吸し、肩の力を抜く。
そして、杖を自分の顔の前で構える。

『お願い！何でもいいから、私の声に応えて！！』

心の中で叫び、呪文を唱えて杖を振った。

そして、再び起きたのは爆発。
それを見たルイズは、その場にへたり込む。

「……そんな」

留年、重たい二文字がルイズの背中にのし掛かったと思ったら、ルイズを遠巻きに見ていた生徒の一人が叫んだ。

「おい！何かいるぞ！！」

その声に、ルイズは希望に満ちた表情で顔を上げたが、一瞬で凍り付いた。

「おんどりゃァ……白ひげぇ！！」

土煙から現れたのは、口や額から血を流し、こちらを睨む中年男性だった。

しかし、コルベールよりも遥かに身長が高い。
三メイルに近いのではないだろうか。

身なりは、ルイズ達が見たことも無い赤い服を着ており、肩にはマントらしき物を羽織っていた。

「もしかして、貴族を召喚しちゃった！？」

その呟きが聞こえたのか、血まみれの男性はハッとした様子で辺りを見回す。

「とこじゃァ……ここは」

召喚された事に気づいていなかったらしく、混乱した様子でキョロキョロと視線だけを動かしていた。

そして、その視線がルイズを捉える。

ヒッとルイズは尻込みした。
あんな殺気な満ちた視線、ぶつけられた事が無かったからだ。

その殺気に反応し、コルベールや何人かの生徒も杖を抜いたが、そ

れよりも先に大男が怒鳴る。

「貴様、ここは一体どこじゃ。
どこの島じゃ。
……海軍本部は、戦争はどうなったんじゃァ！！」

その怒声が傷に響いたのか、大男は膝をついた。
少し血を吐き、ルイズを睨む。

その殺気に殺されると思ったルイズは、咄嗟にその大男に使い魔契約の呪文と共に、キスをした。
膝をついていた事で、何とか大男の唇に届く。

いきなりキスされた大男は驚いた様子だったが、すぐに立ち上がってルイズの首根っこを掴む。

ギリギリと力が加えられ、本気になったらねじ切られるのではないかと思った程だった。

「貴様……ふざけた事を……！？」

コルベールがルイズを助ける為に飛び出そうとした瞬間、大男はルイズを放り投げ、頭を抱える。

「ぐァッ！！
何じゃ？……頭が、割れる！！」

片手で頭を押さえつつ、空いた手を放り投げたルイズに向けた。

「何をしたのか知らんが……ぐッ！

舐めた真似しくさりよって！！」

独特なニュアンスの口調だな、ルイズは冷静に考える。

その黒い手袋を嵌めた手がどす黒い赤色に燃え上がるのを、彼女は異様な程冷静に見つめた。

彼の伸ばした腕の先にある草花が、一気に燃え上がる。

手の先からは、手袋と同じく赤黒い粘着質の物が垂れており、それが地面に落ちる度に草原は黒煙を上げた。

少なくとも、百度以上はあるだろうと考えれる熱を持った手。

そんなモノで掴まれれば、まさしく焼き切られる。

何故、杖も無しにそんな事が出来るのかは知らないが、それを考える余裕はルイズには無い。

「ひぃ……アァッ！！」

ルイズは腰を抜かし、恥も外聞も無く後ずさるが、大男の手が彼女に触れることは無かった。

「ぐぅ……がはッ！」

その前に、その大男が気を失ってしまったからだ。

ルイズは大男が地面に倒れ込むまでジッと見つめ、その巨体が地に伏してしばらく経った頃、ようやく冷静になれた。

恐る恐る近寄ったルイズは気絶した大男の腕を見たが、自分達と変

わらない腕である。

取り敢えず、ミスタ・コルベールの力を借りて、“浮遊”の魔法で大男を医務室まで連れて行った。

医務室のベッドで眠る大男を、ルイズは椅子に座りながら見つめる。ベッドはサイズが合わなかったので、幾つかを合体させた物だった。医務室に勤める水メイジによれば、この大男はこちらに来る前にかなりのダメージを負っていたらしい。

身の丈三メイル、しかもかなり筋肉質な体型の彼をここまで手負いにさせるとは、一体どんな相手なのだろうか。

そもそも、この大男は一体何者なのだろうか。

肩にはコートを羽織っていたので、どこかの国の平民の軍人だろうか。

そんな事を考えていたら、大男が目を覚ましたらしい。

鋭い眼光で、医務室を見回した。

そして、その瞳がルイズを捉える。

ルイズは反射的に悲鳴を出したくなるのを抑え、彼の視線に耐えた。
しばしの沈黙。
ルイズの背中には、冷や汗がダラダラと流れる。
そして、大男が口を開いた。
「貴様が、ワシの主か？」

驚いた事にどうやら契約のルーンのお陰で、この大男は他の使い魔と同じく、ルイズに従順になったらしい。
彼の左手には、見たこともないルーン文字が踊っていた。
大男はルイズを主と認識すると、彼女を“お嬢”と呼ぶようになり、最初に会った時とは正反対の態度である。
「お嬢、ここは一体どこなんじゃろうか？
全く覚えが無いんじゃが」
キョロキョロと辺りを見回す大男。
どうやら、記憶も少し無くなっているようだ。

まぁ覚えていたら、今頃自分の首はへし折られていただろうが。
ルイズは罪悪感を感じつつ、彼に使い魔となった事を伝え、その内容も伝えた。
その話を聞いている中、彼は何度か頷くだけだったが、話が終わると少し黙る。
ルイズはその間に、大男の顔を見つめていた。
『年齢は大体、四十か五十って所かしら？
それにしても鍛えた体ね。
やっぱり、軍人か傭兵のどちらかかしら』
すると、自分の体に黒い影が掛かる。
何だろうかと思っていると、いつの間にか寝ていた筈の大男が着替えており、自分の隣に立っていたのだ。
「〜〜〜！！」
ルイズは声にならない叫びをあげたが、大男は気にした様子も無い。
「使い魔の仕事は分かった。
で、ワシは何をしたらええんじゃ？」

ルイズは非常に満足だった。
使い魔のサカズキ……大男の名前で、あだ名は赤犬らしい……は自分の言う事をよく聞いてくれるし、何だか凄く頼もしく感じる。

ルイズは今、午前中の授業を終えて昼食の真っ最中なのだが、その午前中の授業の際に、教室に来たルイズとサカズキを見てバカにした学生がいたのだが、その学生はサカズキが一瞥しただけで萎縮し、完全に迫力負けしたのだった。

そして、授業の最中に自分が魔法を失敗した時も、サカズキだけは笑わなかったのだ。

「人間、正しく生きていれば価値ある者になる。
お嬢は、その杖で出来た手のマメを見る限り、正しく生きとるようじゃのう。
自分は他人のように出来なくとも、その他人も自分のようには出来ん。
お嬢のやるべき事を正しく見つけ、それを真っ直ぐに実行すれば、道は拓けるけぇ。焦るな」

そう言って、励ましてもくれた。

その彼は、今は厨房で食事をしている。

この食堂は貴族専用といったふざけたルールがあるので、彼女の大

切なサカズキが入れなかったのだ。

そもそも、何故こうも貴族が威張っているのだろうか。

食事ですら平民が作って、彼らが運んだ物を食べているのに。

何故、こうも貴族は平民を虐げるのだろうか。

ただ生まれや家柄が違うだけで、魔法を持っているかいないかだけで区別される世界に、ルイズは生まれて初めて嫌悪を覚えた。

そんな思いにふけっていると、食堂に怒鳴り声が響く。

ルイズは手で回していたグラスを落っことしそうになったが、何とか耐えれた。

彼女は訝しげに声のした方向を向くと、彼女の同級生であるギーシュ・ド・グラモンと言う男子生徒がメイドを土下座させ、何やら喚いているようである。

ルイズは更に顔をしかめた。

女の子相手に、一体何をやっているのだろうか。

ルイズは席を立ち、その騒ぎの輪の中に入って行った。

「ちょっとギーシュ？

あなた、真っ昼間から女の子土下座させて、何やってんのよ？」

そう言うと、ギーシュは鬱陶しそうにルイズを睨む。

どうやら、このメイドの女の子がギーシュの落とした小瓶を拾い、それをギーシュに返したら彼の二股がバレてしまい、その責任をこのメイドに求めたらしいのだった。

それを聞いたルイズが一言。

「バッカじゃない？」

その瞬間、食堂が凍りついた。

ギーシュは一瞬呆気に取られた表情をしていたが、すぐさまその端正な顔に血を昇らせる。

「馬鹿とは何だね！！
ゼロの分際で！！」

「あら、私の魔法とこの事は関係無いんじゃなくて？
それと二股かけてた最低男に、私をゼロとか罵る資格があると思うの？」

周りはルイズに同調し、そうだ！そうだ！とギーシュを批判しまくった。

それが面白くないのは、無論ギーシュである。

現在、自分の立場は最悪だった。

何か捌け口はないかと思っていると、人混みを掻き分けて、一人の大男が現れる。

「どうしたんじゃア、シエスタ。
こんな所で座り込んで……」

ルイズの使い魔。確か、サカズキとか言った平民の男だとギーシュは思い出した。

一方、サカズキは厨房で食事を摂っている際に料理長のマルトーやシエスタと知り合ったので、単に戻ってくるのが遅くなった彼女を見にきただけなのだ。

ちなみにサカズキは敵や馬鹿な味方には容赦はしないが、正しく生きる一般市民に殺気を振りまく程愚かではないし、ルイズという主の風評もあるので、顔が怖いというのはどうにもならないのだが、愛想ぐらいは使えるのである。

そんなサカズキをギーシュは、品定めするかのように見た。

確かに、体格はそこらの傭兵よりも立派だが、所詮は平民だろう。

そう思ったギーシュは、こう言ってしまった。

「貴様、ルイズの使い魔だな！
主の責任は使い魔の責任でもある！
よって、僕は君に決闘を申し込む！！」

そして、ギーシュとサカズキの決闘は始まった。

場所はヴェストリの広場という、この学校でも目立たない場所である。無論ルイズは止めたのだが、サカズキはギーシュがルイズを馬鹿にした事が許せないのと、女子二人を悲しませた事、更にはそれを親切にも届けたシエスタの責任にしたのが我慢ならないのだった。

ついでに言えば、“メイジを見るならば使い魔を見よ”と言われているようなので、自分の力を見せれば、ルイズも少しは待遇が変わるかもしれないと思ったのだ。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュは胸に差した薔薇を掲げ、そう宣言する。

ちなみに、サカズキのスーツの胸にも薔薇の花が差してあるのだが、誰も気にする者はいなかった。

「……サカズキ、頑張んなさいよ」

ルイズは彼が怪我しないかだけが心配であり、隣のシエスタも同じようだ。

「ヴァリエール？
大丈夫なの？あなたの使い魔。
確かにマッチョなおじ様だけど、ギーシュ相手じゃキツいんじゃな

い？」

そう言って彼女の後ろから現れた美少女。

褐色の肌と燃え盛るような赤い髪。

身長は一・七メイルと、同世代の女子としては長身である。

その顔の彫りは深く、胸もルイズとは正反対に、かなり大きい。

それを総じて、ルイズはこの美少女。

キュルケ・アウグスタ・フォン・ツェルプストーが大嫌いなのだった。

彼女はルイズの母国、トリステインの隣にあるゲルマニアという国からの留学生で、キュルケの実家のツェルプストー家はルイズの実家と領地を国境で隣接しているので、戦争の度に何人もの一族が死んでいるので、つまりは家柄での敵なのだ。

しかも、ツェルプストー家は代々男女共々、色に長けた人物を輩出しており、ルイズのご先祖様はその色男や女に恋人やら配偶者を寝取られまくっているので、あまり良い印象が持てないのである。

その色魔一族に漏れる事無く色魔なキュルケは、真面目なルイズにとっては鬱陶しい事この上ないのであった。

「……キュルケ、あんたに心配される筋合いは無いわよ」

ルイズが振り向くと、キュルケは青髪の美少女を連れている。

自分と似たような体型の彼女は、確かタバサといった。
彼女は本を読みつつ、腰を下ろす。
どうやらキュルケに無理やり連れてこられたようで、決闘に興味は無いらしい。
眼鏡の奥に光る青い瞳で、本を食い入るように読んでいた。
「あら、でもあのおじ様は負ける気は無いみたいじゃない？
何か秘策でもあるのかなァ～って思っただけよ」
そうキュルケは答えると、決闘の場へと視線を向ける。
決闘は始まろうとしていた。
「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。
よもや、文句は無いだろうね？」
ギーシュは薔薇の花の杖を振り、一枚だけ花びらを地面に落とす。
すると、花びらの落ちた地面が盛り上がり、甲冑を纏った女戦士の人形となった。
サカズキは、それを鋭い眼差しで見つめる。
身長はサカズキよりも小さいが、その人形を見る限りは金属製だ。
授業でも見たが、確か“錬金”という魔法だと思い出す。

「言い忘れたね。
僕の二つ名は“青銅”。
青銅のギーシュだ。
よって、この青銅のゴーレム“ワルキューレ”がお相手しよう。平民君」

「能書き垂れとらんで、早よう掛かってこんかい」

この瞬間、サカズキならギーシュを十回程殺せたのだが、一応律儀に彼の演説を聞いていたのだった。

一方ギーシュは顔に赤みが差し、そこに殺気が滲み出る。

「……君は余程死にたいようだね」

ギーシュがそう呟くと、ワルキューレはサカズキ目掛けて走り出した。

そのスピードは、例えば男子高校生ならば避けるのには無理であろうが、海軍本部最高戦力であるサカズキにとっては大した脅威でも無かったし、迎撃にも労は要らない。

サカズキは無造作に足を蹴り上げ、向かってきたワルキューレをギーシュに返した。

本来ならば殴り飛ばすのだが、身長差から殴るよりも蹴った方が良いと思ったのだ。

青銅人形は面白いように地面を転がり、ギーシュの真横を通り抜け、後ろの壁に激突した。

その胴体は折れ曲がり、ほぼ千切れている。

「……なッ！あァ？」

ギーシュの脳内ではサカズキが倒れ、それを踏みつける自分の映像を確信していたのだが、実際にはワルキューレはいとも簡単に破壊されてしまった。

その現実に、頭が数テンポついて行けない。

呆然とするギーシュを、サカズキは冷ややかに見つめた。

この隙に倒しても良いのだが、もう少し見せつけてからでも遅くはない。

一方、ルイズ達も驚いてサカズキを見ていた。

「ギーシュのゴーレムが、一発で」

ルイズは、使い魔が外見と同じぐらい強かったのに驚く。

「へぇ、すっごいじゃない」

キュルケは型通り、といった感じに驚いた。

これ位ならば、平民にも出来るだろうと思ったからだ。

タバサは本から一瞬視線を外し、サカズキを視界に入れた。

「……まだまだ、これから」

「もう、終わりとはのう……」

サカズキは呆れたようにギーシュを見下ろした。

彼は俯いている。

ゴーレムとやらを破壊された事が無いのだろうか。

まぁ、別に痴話喧嘩風情で本気を出す彼ではないが、少なくともギーシュが泣かせた女や、馬鹿にしたルイズには謝らせるつもりだ。

せめて、一発くらいは殴らせてもらおうと思い、ギーシュに近寄る。

足を、一歩前に出した。

すると、次の瞬間にサカズキの周りにワルキューレが六体現れる。

それぞれがハンマーや斧等の武器を所持していた。

周りを見回したサカズキは、溜め息を吐く。

どうやら、罠にハメられたようだ。

ギーシュはしめたといった表情で、顔を上げた。

「ハハハッ！かかったね！！

僕のゴーレムは七体まで出せるのさ！
これで形勢逆転だ！！」

ワルキューレが、武器をサカズキに向ける。

サカズキは頭に被ったキャップを下向きにずらし、目元がよく見えなかった。

「さぁ！降参するなら今の内だよ！？
でないと、このワルキューレが君を滅多刺しにしてしまうぞ！！」

ハラハラとルイズは囲まれたサカズキを見ていたが、勇気を出してギーシュの前に飛び出す。

「ギーシュ！やめて！
もう、勝負は着いたわ！
サカズキの代わりに、私が何でもするから……」

だが、ギーシュは反吐の出るような笑みを消さなかった。

「ダメだね！僕は彼と決闘してるんだ！
彼の口から聞かないと、僕は杖を引かないよ！」

ルイズは後ろで囲まれているサカズキを見る。
キャップを片手で抑え、視線を下に落としていた。

使い魔。
数少ない自分を馬鹿にせず、励ましてくれた人。

それに、自分が無理やり連れてきたという負い目もあった。

だから、このまま死なせるわけにはいかない。
「サカズキ！命令よ！
降参しなさ……」
「……のう、お嬢」
今まで黙っていたサカズキが、ポツリと呟いた。
「何で、そうすぐに逃げようとするんじゃァ？
お前は何もしちょらんじゃろうが」
「何でって……あなたを助けるために……」
サカズキは、海軍の者が見たら目を疑うような優しく不器用な笑みを浮かべる。
「お嬢は、確かにゼロじゃ言われちょる。
じゃがのう、それのどこがいかんのじゃ？」
「えッ……？」
「お嬢はお嬢の正義を貫けば良い。
誰がお嬢の先を行こうとも、お嬢は普段の勝ち気な娘でおれば良い。
それが駄目じゃとは、このわしが言わせん。
それが使い魔の仕事じゃろう？
元の場所に帰るまでじゃがな」
「……あなた、記憶が無いんじゃ」

「しっかり覚えちょるぞ？
暴れて帰れるわけでも無し、単に面倒事に巻き込まれたくなかっただけじゃ。
じゃが、わしはお嬢の気骨が気に入った。
お嬢の使い魔として、しばらく過ごすとするわい」

「……サカズキ」

ルイズの瞳が潤んだ瞬間、ギーシュが薄く笑った。

「なら、二日目で引退する事になるね」

ワルキューレが、一斉にサカズキの体に得物を振るう。

剣が斧がハンマーが槍が、サカズキの体へと突き刺さり、赤い液体を噴き出した。

それを見た観衆が、騒ぎ出す。

「馬鹿な平民だぜ！
血まみれになってやんの！」

「ハハハハ！！」

等々、到底貴族とは思えない言葉に、ルイズは吐き気を覚えた。

「サカズキ……」

ルイズはギリッと歯を噛み締め、目を吊り上げてギーシュを睨んだ。

「何だい、その目は？
魔法も使えない貴族モドキが、そんな反抗的な目をしてもいいと思うのかい？」

ギーシュは顔に不愉快だ、と言わんばかりの表情を浮かべ、ルイズの腕を左手で掴む。

「君にも、少し貴族らしさを教えないといけないのかな？」

周りはギーシュが怒りやサカズキを殺した満足感で、我を失っている事に気づき、止めようとした。

だが、周りが動くよりも先に、ギーシュの左腕を赤い物体が飲み込んだ。

「……へ？」

赤い物体はとてつもない高温で、ギーシュの腕を溶かしたのだった。

自分の腕が焼かれ、その焦げた臭いが鼻についた瞬間、ギーシュは理解する。
左腕が無くなった事に。

「ひィやァァア！！！」

くすぶる煙の立つ腕の断面を押さえつつ、ギーシュは地面を転げ回った。

そして、信じられない物を見た。

先程殺した筈のサカズキが胸に武器を突き刺したまま、ワルキューレ達に囲まれたまま、その赤く黒い煙を噴き出す左腕を伸ばし、ギーシュの左腕を溶かしたのである。

「無防備な女に手を出すとは……どうやら、生かしちゃおけんようじゃのう」

サカズキの顔には武器が突き刺さっている痛みなど、全く無い。

普段と変わらない、厳つい顔だった。

「……サカズキ？
あなた、大丈夫なの？」

サカズキはルイズの言葉に、当然だと言わんばかりに答える。

「わしは体を自在にマグマに変える事が出来てのう……。
如何なる攻撃も、わしの前には……」

次の瞬間、サカズキの体が真っ赤な物体……マグマに包まれた。

その熱に耐えかね、ワルキューレを構成する青銅が溶け始める。

「……無力じゃァ」

ワルキューレが溶け、胸に一本の剣が刺さってはいるものの、サカズキの周りには焦土と化した校庭が広がった。

芝生に炎が燃え移り、水メイジ達が必死に消火を行う。

そして、場面は最初に戻った。

「で？ギーシュ。
まだ続けるか？」

サカズキは嗜虐的な笑みを浮かべ、ギーシュを見下ろす。

無論、答えはノーだった。

ギーシュはこれ以降、出番と共に左腕を失ったのである。

しかし、ギーシュは左腕の代わりに、金髪巻き毛の大切な恋人を手に入れたそうである。

こうして、サカズキとルイズは主従関係というか、仲間意識のようなものを持ったのである。

ルイズはこの後、フーケの盗んだ学院の秘宝“破壊の果実”……サカズキが言うには“悪魔の実”……を食べ、“ボムボムの実”の爆弾人間となり、フーケのゴーレムを爆破したり、フーケの正体がミス・ロングビルという学院の女性秘書だったり、彼女はサカズキに色んな意味で喰われてサカズキに夢中になるし、ついでにキュルケも喰われて夢中になるし、更にはこのトリステインの王女様から依頼があり、ルイズの婚約者のワルド子爵と空飛ぶ大陸アルビオンに向かったり、その際空賊を名乗る奴らをサカズキが半殺しにしたら、

そいつらが依頼の皇太子で、そして皇太子についてニューカッスル城へと行ったらワルドが裏切り者で、レコン・キスタという革命軍に参加している事を言い、皇太子を暗殺しようとしたのだが、その前にルイズの吐息バズーカがワルドの杖を腕ごと吹き飛ばし、サカズキがワルドをマグマの海に飛び込ませる方が先だったので、大した事は無かった。

そして、サカズキはニューカッスル城のバルコニーに立ち、城下に陣を敷くレコン・キスタ、空中に展開する艦隊を睨んだ。

彼らは悪である。

反乱軍は許さない。悪は許さないのが彼のモットーなので、ここは王族に加担する事にした。

「一体、彼は何をしているんだい？」

皇太子は溶岩の海に沈み、既に消滅したワルドがいたであろう床を見つめつつ、ルイズに尋ねる。

しかし、ルイズは皇太子に微笑みで返し、サカズキを見た。

「赤犬、やっちゃって！」

サカズキは頷き、バルコニーの中央に立つ。

そして腕からマグマを噴き出し、足元に溶岩の池を作り出した。

「流星火山」

そう呟くと、サカズキは天に向けて拳を突き出す。

すると腕に纏った溶岩が、意思を持ったように空へと昇って行った。

レコン・キスタも、遥か上空に飛んでゆく溶岩を眺めていたが、彼らはこれを戦争を諦めた王軍の放った花火だと思ったので、大した警戒もせず、呑気に鑑賞し、歓声を上げている。

しかし、ある反乱軍兵士が気付いた。

……空から、何か降ってくるような鈍い音がすると。

どんどんと大きくなる音に、互いの顔を見合わせつつ、空を見上げる反乱軍。

そして、呑気に口を開けていた兵士の目が見開かれ、驚愕の表情を浮かべた。

空に漂う黒雲を突き破り、真っ赤に燃えたマグマの拳が、真っ直ぐ自分達の野営地に向かってきたのだから。

最初の一発は、野営地中央の宿舎に直撃し、中で仮眠を取っていた

兵士を永久の眠りに叩き落とす。
そこからは、楽しい花火鑑賞から一転し、地獄が始まった。
「逃げろ逃げろ！」
「マグマの雨だァ――！！」
叫び、惑いながら逃げ回るレコン・キスタ。
「第八部隊、壊滅！」
「マグマに火薬庫がやられ、武器の大半が焼失！！」
「死傷者多数！！」
ニューカッスル城下にある司令部でも、将校達は大パニックを引き起こしていた。
落城まじかのニューカッスルから、まさかの攻撃である。
完全に戦勝ムードになっていたので、参謀長を含めた将官ですら冷静さを保てなかった。
そして、司令部に伝令が一人、慌てた様子で入ってくる。
「大変です！
溶岩の拳が、こちらに……」
その瞬間、司令部の建物に摂氏数千℃のマグマが激突し、中にいた将兵全ての命を奪った。

一方空中に展開した艦隊も、最早ただの的の様な状態になっている。
木製帆船の甲板にマグマが降り注ぎ、一瞬艦体が膨れ上がった瞬間、爆発炎上し、一気に地面に墜落した。

「左！左へ避けろ！！」

「操艦技術、見せつけてやれ！！」

熟練した海兵の技ですら、空から降り注ぐ数百のマグマの鉄拳を回避するのは不可能だ。

次から次へと直撃し、墜落していった。

「えぇい！

旗艦は、この“レキシントン号”だけは守るのだ！」

「ダメです！本艦のデカさでは、ただの的に！！」

総司令官の指揮虚しく、艦隊の中でも一際巨大な軍艦にも数十のマグマが降り注ぎ、火達磨となる。

「ダメージコントロール限界！！

前甲板、後甲板、全砲門、兵員準備室、風石室大破！！」

「浮力低下！浮力低下！」

“レキシントン号”の真横を飛んでいた巡洋艦“チャールズ号”は、暖炉にくべる薪の如く燃える巨艦を眺めつつ、全速力で後退した。

「……一体、何なんだ？これは……」

“チャールズ号”艦長、サー・ヘンリ・ボーウッドは、旗艦が轟沈するのを呆然と眺めつつ、ニューカッスル城を振り返る。

城から飛び出たマグマ、一体何なのだろうか？

マグマを操る魔法など、聞いた事が無かった。

彼がそう思っていると、“レキシントン号”が最期の爆発を起こし、大地に墜ちる。

「……まるで、この世の終わりを見るようだ」

皇太子は冷や汗を流し、城外で起こる惨劇を目に焼き付けていた。

無数のマグマの塊が敵へと降り注ぎ、一部の逃げ出した艦隊を除いて、敵軍は壊滅である。

それを……その地獄を作り出した使い魔とその主は、ただただ、地獄を無表情に眺めていただけだった。

後にサカズキが海軍へ帰るまで、この二人は互いの正義を貫き通し、

学院を退学したルイズはサカズキに鍛えられ、最後には貴族を捨てて勧善懲悪に生きる正義の使者となる。

二人は“煉獄”　サカズキと“爆姫”ルイズと呼ばれ、ハルケギニア中の犯罪者達の恐怖の対象となるのだが、それはまた後のお話。

～後日談～

家族も捨て、正義に生きたルイズの死後、サカズキは元の海軍本部の戦場へと戻った。

白ひげの攻撃を受けてマリンフォードから落ち、海に落ちないため、何とか瓦礫の上に着地した時から、どうやら数分しか経っていないらしい。

クザンやボルサリーノ並みに信頼出来る間柄となったルイズとは、あれから何十年も過ごした筈だったが、あれは自分の夢だったのだろうかと思ってしまう。

……しかし、サカズキは自分の口や鼻から流れ出る血に気付いた。

これは、余命を感じたルイズが最後の最後に仲間としてサカズキと命を賭けた決闘をした時、サカズキが彼女にトドメを刺す前にやら

れた傷だ。
そして、ルイズは笑って死んだ。
楽しかった、と笑っていた。
全く持って、戦いに明け暮れた時間だった。

「……ふふっ」

サカズキは微小を浮かべ、すぐに頭を切り替える。
戻ってきたのなら、自分にはやらねばならない事があった。
すぐさま剥き出しになった岩盤に飛び付き、体をマグマに変えて溶かし進む。
狙うは“麦わらのルフィ”ただ一人!!
地下を溶かし、覇気を使って目標を探し出した。

わしは、わしの正義を徹底的に貫き通す。
お前とわしがそうだったように……なぁ、ルイズお嬢。

～onepieceより、海軍本部大将赤犬が召喚されました～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6370p/

絶対正義な使い魔

2010年12月21日22時55分発行